

患者の家族を経験した看護

私が看護とは何かを考える時、決まって父を思い出す。私が看護師を目指したきっかけは父の死を経験したことがある。父は会社の健康診断で胃癌が見つかり、胃の三分の二を切除した。家族の落胆は大きかったが、社会復帰を目指す父の威力はすさまじかった。「手術でせつかく助かった命なのだから、これからは苦しんでいる人のためにこの命を使いたい」と、民生委員になり、命の恩返しをした。

その父を、再び病魔が襲った。咽頭癌だった。父に選択肢が言い渡された。放射線療法と咽頭の切除術だ。放射線治療は火傷のような炎症と苦痛を伴うが、当分話す事はできる。咽頭の切除はその名の通り、腫瘍と声を取るというものだ。民生委員という役職もあり、父は声を奪わないで欲しいと、放射線療法を選択した。しかし経過は芳しくなかった。父は涙を流しながら、とうとう声を失った。永久気管孔と電気式人工咽頭が父の呼吸と声に欠かせないものになった。そんな体でも、民生委員は辞めようとはしなかった。母のサポートもあり、命の恩返しをし続けた。その最中、東日本大震災が起こった。呼吸が苦しい状態で、父は独居の高齢者の安否確認に奔走した。

これほどまでに命の恩返しをしても、天は意地悪をする。肺への転移で余命宣告をされた。「来年のお正月が迎えられるといいですね」という医師の言葉に、泣きながら家族で一致団結した。周囲のサポートもあり、父は新年を迎えることができたが、その後すぐに緩和ケアの病院へ入院した。母は二十四時間父を介護した。母が帰宅できなくなったので、家は私と妹で守る事になった。父の容態は日に日に悪化してゆく。私達家族も心身のバランスを崩していた。

入院から四十日、父は息を引き取った。緩和ケアのおかげで鎮静状態のまま最期を迎えることができた。看取りの際、受け持ってくれていた看護師から「親の死というのは、親が身をもって教えてくれる最後の教育だと、看護学校で教わった事があります」と声をかけてもらった。私はその言葉があったからこそ、父の死を正面から見つめ、そして学び、看護の道を目指す事ができた。

振り返ると、病と闘う父とその家族を支えてくれていたのは、紛れもなく医療スタッフだ。苦しんでいる患者に対して家族は、弱音を吐いたり、辛いという顔を見せたりできない。また、残された時間を共に過ごす一家団欒が、その後の家族の心の安寧に重要だと未をもって学んだ。私はその経験ができたからこそ、死と向き合う患者や家族に、より一層寄り添うケアをしていきたい。